

体外受精新鮮胚移植周期における採卵当日の Progesterone 値が及ぼす影響に関する検討

松岡麻理<sup>1</sup>、重田護<sup>1</sup>、北山利江<sup>1</sup>、太田志代<sup>1</sup>、山内博子<sup>1</sup>、勝加奈子<sup>1</sup>、門上大祐<sup>1</sup>  
中岡義晴<sup>1</sup>、森本義晴<sup>2</sup>

<sup>1</sup>IVF なんばクリニック <sup>2</sup>HORAC グランフロント大阪クリニック

【目的】

体外受精新鮮胚移植周期において、**Maturation trigger** 日（トリガー日）の血中 Progesterone 値（P 値）が上昇した症例では妊娠率が低下することが知られている。今回、我々は体外受精新鮮胚移植周期において採卵当日の血中 P 値が胚や妊娠に及ぼす影響について検討した。

【方法】

2014 年 1 月から 2016 年 12 月に当院で調節卵巣刺激周期（Long 法：331 周期、Antagonist 法：423 周期）に新鮮分割期胚移植を行った 754 周期を対象とした。それらを採卵当日血中 P 値が 0～3.99 ng/ml、4～7.99 ng/ml、8 ng/ml 以上の 3 群に分類し後方視的に比較検討した。なお、トリガー日の血中 P 値 > 1.5 ng/ml、E2 値 > 3500 pg/ml、採卵数 ≥ 20 個のいずれかを満たした症例は全胚凍結とした。

【結果】

平均年齢は 36.8 歳で、3 群間で経産回数、受精方法に有意差は認められなかった。採卵当日血中 P 値の上昇により、1 回採卵あたりの回収卵子数が有意に増加したが（ $p < 0.001$ ）、成熟卵子率、正常受精率、分割率、Day3 良好胚率、妊娠率、流産率に有意差は認められなかった。

また、Long 法、Antagonist 法に分類した検討では、Long 法で採卵当日血中 P 値の上昇により成熟卵子率の上昇（ $p : 0.037$ ）と分割率の低下（ $p : 0.0083$ ）を認めたが、Day3 良好胚率、妊娠率、流産率に有意差は認められなかった。

【結論】

採卵当日の血中 P 値の上昇による妊娠予後への影響は明らかではなかったが、胚へ影響する可能性が示唆されたためさらなる検討が望まれる。